

回 答 書

伏見町地区市街地再開発事業（以下、「再開発事業」という）に対する現時点の意向は下記のとおりです。

平成21年10月28日

福山市伏見町市街地再開発準備組合御中

福山市伏見町4-8

安原 幸雄

○ 再開発事業実現に向けての活動をやめて、新たな「まちづくり」に向けて再スタートしてほしい。

駅前に人がそぞろ歩きできるような緑と水をたたえた公園があれば、人々はどれだけ癒されるだろう。

今の時代において、中心市街地に人を寄せ付ける魅力とは、このような大掛かりな仕掛けづくりが必要ではないでしょうか。ただ単に、どこにでもあるような商業施設と住宅を伴った大規模な再開発ビルを造ったところで持続するまちづくりにはならない。

城をシンボルに福山駅前広場と一体で城下町の風情を醸し出した、歴史を生かした賑わいのあるまちづくりはできないだろうか、という発想から私のまちづくりの夢は膨らんできた。

しかし、市のまちづくりの理念とリーダーシップの欠如により、既に駅前広場の工事は着々と進められている。また、伏見町再開発事業においては、中心市街地の活性化に向けた「まちづくり」として進められてきたはずが、ただだらと続けられたために「まちの活性化」の道を閉ざしてしまい「まちの機能」や「まちのコミュニティ」を崩壊し、結果的には「まちこわし」となってしまった。その間、取り巻く環境面では、リーマンショックに端を発した急激な経済の後退によりパートナー企業は次々に去り、さらに追い打ちをかけるように「金の切れ目は縁の切れ目」とばかりにコーディネーターのGA建築設計社が辞退することとなった。

ここにきてやっと執行役員は今までの呪縛から解き放たれ、今回の意向調査をせざるを得ない状況まで追いつめられたのではないかと。私も当初は片棒を担いだが、現執行部は今迄の間、地域住民の声に耳を傾けず、住民を「賛成」「反対」と二分に対立し混乱させた責任は重い。住民の間では再開発に対する不信感だけが残ってしまった。

私たちは、この機会に、再開発の幻想から目を覚まし、まちづくりの原点に立ちかえり、いちから「住民が主体となったまちづくり」を再スタートしていくべきではないだろうか。

つまり、「再開発事業一辺倒のまちづくり」から脱却し、「住民が主体となったまちづくり」へと発想を転換していく必要があるのではないかと。そのためには、現準備組合は解散して「まちづくり協議会」から出直すべきだ。具体的には、まちのコンセプトを策定したうえで、できるところから街なみ環境や防災街区などの整備事業と部分的な再開発事業も絡め、総合的なまちづくりを目指してほしい。